
P × H

バスカビル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P × H

【Zマーク】

Z6752J

【作者名】

バスカビル

【あらすじ】

神様の手違いで死んでしまった少年がH×Hの世界でパンandlerハーツのチエインを従えて暴れまわる、そんなお話を。

プロローグ（前書き）

初めての小説でつまらないかもされませんがよろしくおねがいします。

プロローグ

はじめまして、僕はビートでもいる普通の男子高校生だ。

あつでも漫画はけつこう好きだけだね。

そんな僕は今雲の上にいる……。

そう、それは20分ほど前のことだ。

僕はいつものように漫画を読んだいた。

「あー、エ×エ面白いなー、こんな世界に行つてみたいなー。まつ

そんなこと無理だけねー」

そう言つた時、田の前の空間がグーヤリと曲がつた。

「#〒 〽 = @? 〽 - @# - % 〽 〽.〽」

僕が声にならない声を上げると体中に痛みがはしつた……。

そして僕はいよいよいるのだ。

あたりを見まわすとおじこさんがのんびりお茶を飲んでいた。

「あの、すいませんーこはいつたいどーですか、私はだれ?…かは
わかつているんですけど、あの、その、」

僕が尋ねるとおじこさんは、

「まあ、おちつきなさい順を追つて説明しよう、まずは天国とか
極楽とかよばれている場所じゃ、そして私は神様じゃ。」

はつ。ちよつとまでよなにを言つてているんだこのおじこさんは、可
哀想にボケてしまつていてるのか……。

「失礼なガキじゃのー。私はれつしきとした神様、その証拠に、お
前の秘密もすべてしつているぞ。例えば、おまえの一番恥ずかしい
秘密は、一年生のとき、〇〇〇が×××で一セリフ\$ \$\$が##
「さやーーーなぜそれをーーー」僕は耳をふさいで絶叫した。

「ホツホツホ、しんじたかの?」

「はー……」間違いない、このひとは神様だ。あれを知つてはいるな
んて……。

「つて」とは、僕は死んだってことー！」

「ああ、すまんの一、ちょっととした手違いでのー」

「そんなー」まだしたいこともたくさんあつたのこー。

「じゃが安心せい、いきかえらせてやるからの一」

「ほつ、ほんとですか！」

「ああ、ただしもといたせかいではむりじゃがの一」

「えつなんですか？」

「それはもう、君の死体が発見されてしまつたからじゃ、今から生き返つたらホラーじゃる」

「そ、そんなー」

「だからせめてものおわびにH×Hの世界にてんせにわせいやる」

「ま、まじですか」

「ああ、まじじゃ。それと念能力はひみつじや。それではつきの人生を楽しんでくれ」

「つして僕は生まれ変わつたのだつた。

プロローグ（後書き）

「どうぞ、一応このままかいていきたいと思いますがつまらなければどうがつまらないか教えて欲しいです。

目がさめぬと…（前書き）

今回はみじかいです、パンドラハーツをみたことがないひとにはわかりづらいかもしだせますが、見たことがない人にも楽しめるようしたいです。

目がさめると…

……んー、なんだか騒がしいな。男の声と女の声がする。

「ねえあなた、この子の名前なにがいいかしら」

「そうだなー、あーアリスなんてどうだらう」

「まあ、ステキな名前。きまりね、この子の名前はアリスよ」
「はい?えつちよつとまって、僕男なのにアリスつて……。んつ、て
ことはこのひとたちが僕の新しい親つてことか。

僕は恐る恐る目をあけてみた。

目の前にいるのは二人の男女、男のほうは金色の髪にエメラルドグリーンの瞳、女のほうはながい黒い髪にスミレ色の瞳。

こ、このひとたちはアリスとオズにソックリだ。ま、H×Hの世界だからパンドラハーツの設定は関係ないだらうけど。

両親の顔をポケーっと見ていると両親とは別の人気配がした。

「オズ、アニー、子供が生まれたんだつて?おめでとつ」

「ミト、ありがとづ」

んつミトだつて?つてことはあの布のなかにいるのがゴンか。なんか感動。

「ゴンとも仲良くしてくれるとれしこんだけじね」

「きつと仲良くなるとおもうわ」

父、母、ミトが話しているあいだ、僕はこんなにもはやくゴンとつながりをもてたことに狂喜していた。

目がそれると…（後書き）

次回は数年たつたあとのはなしになります。

森で……（前書き）

アリス＝ア
ゴン＝ゴ
カイト＝カ

森で……

くうーくうー、やわらかくぼくをでらすおひため、じーじーがくらく
風、ぼくはのんびりとひなたぼっこをしていた。

転生からねんねんほじたち、僕は前世のことをわすれてきていた。H
×Hの原作の知識も主な流れがい、細かいイベントは思い出せない。まあ、細かいところまで覚えていたらつまらないからべつに僕
はさきにしていない。わてまたねるとするかな……

ゴ：「おおーーいーー！アーリースー！ーー！」

一瞬で田舎が止めた。

ゴ：「アーリースー」

ア：「ゴン、うるせー…。ぼくねてたのこ…」

ゴ：「わりーわりー、なあ、アリス、森に行つてみよつぜ」

ア：「森？」うーん、なんか森に行くとイベントがあつたよつな…。

ゴ：「なあ行こひ、行こひ、行こひ、行こひ、行こひ、行
こひ」

ア：「わ、わかつたわかつた」

ゴンの勢いにおされるようにして僕は森へむかつた。

森のなかはすがすがしこ空気があふれていた、じばらく歩こっている
とゴンがなにやら見つけたようだつた。

ゴ：「なあ、このつめのあとなんだろう」

ア：「つめのあと?」その木にはたしかにつめのあとがあった、3
ぽんと2ぽんのつめあとが二つをしている、そんなしるしがそこら
ぢゅうにあつた。

ア：「えーと、これはなんだつたつけ」そのとお漫画のワンシーン
があたまにあつかんできた。

ア：「！－！－これはキツネグマがのこすナワバリのシグナルだ！！
！」はやくここをはなれないと、でもはなれたらカイトとあえな
いかも……、いやそんなこと言つていい場合じゃない。はやくにげ

「…「わあ、なんだこいつはー。」ゴンが叫んでくるが」さすがに

アーチル・カーネギー

ア：（ヤ）と、カイトにあえるんだ。実物もかっこいいかなー）
「…」「あ……、あ……」おちつこいでいる…とこうよりカイトにあえる」とをよろこんでいる僕にひきかえ「…」は声もでないようだ。
「…」アアア」キツネグマがゴンにおそいかつたそのとき、ギイ
ンーとこづおととともにカイトがあらわれた。キツネグマのつめを
けんでしゃれとてこる。

力：「子連れキツネグマか……。気の毒だが人間を傷つけちまた
巨獸は……処分する決まりだ」 そういうふたかとおもつとキツネグマ
の首がちゅうをまつた。

森で……（後書き）

ちなみに主人公はカイト大好きです。

カイトイベント発生!?

「たてるか?」「カイトがゴンにたずねる。

「あ、うん」ゴンがよろめきながらたちあがつた。

(あーあ、殴られるぞー。すこしなれてよ)僕はすこしなれて
気配をけした。

ゴン!ゴンがカイトに殴られてふつとんだ。

「馬鹿野郎! ! こんな時期にヘビブナの群生地に入るヤツがあるか
! ! 見る! ! 子連れのキツネグマが残すナワバリの信号だ! ! そこ
ら中にある! ! これを見たらどんなノン気な動物も2秒後にはとな
り山まで逃げるほどヤバいもんだ! ! お前の親父はそんなことも教
えてくれなかつたのか! ! くそ! ! マダラリストの警戒音なんぞ無視
すりやよかつたぜ! ! 久々に胸クソ悪い殺しをやつちまつた「カイ
トがはきすぐるよう」に言つた。

すると、ゴンは暗い顔をして「親父はいない……オフクロも……オ
レがうまれてすぐ事故にあつて死んだって……オレ……おばさんの世
話になつてゐるんだ」

(いやー、きみのおとうさんいきてるんだけどなー)

「……そいつは悪かつた

(えー、いまおとうさんがいるかいないか関係ないんじゃや
いろいろつっこみどころのあるイベントだな。

「おい! そこのお前はだれだ! 」カイトが威嚇してきた。まあ、け
はいを微妙にけしてからだうつが……。

「おい! きこえなかつたのか

「あつ、はー。えーと、僕はアリストベザリウスそこのはゴン=
フリークスです! !

「おまえなぜおれのなまえを……いや、それよりフリークスだと、ま
さか、こいつの親父の名前はジンって言つんじやないか! !

ゴンがおどりいたように言つた。『オジサン親父をしつてるの! ?

「おまえなぜおれのなまえを……いや、それよりフリークスだと、ま
さか、こいつの親父の名前はジンって言つんじやないか! !

（オ、オジサンって……）カイトは少しショックをうけていた。

カイトイベント発生!-? (後書き)

主人公は今の時点でもけつじつといいです。

ハンターになろう!!（前書き）

今回はかなり短いですけどさきのはなしは数年後なのでゆるしていく
ださいね。

ハンターにならう!!

カイトが話しあじめた。

「ジンさんはおれの師匠だ。ジンさんに認めてもらつたための最終試験が「彼を探し当てる」ことなのさ、」これがどんな狩りよりもむずかしい。彼はオレの知る限り最高のハンターだ。ジンさんに会わなきやオレはいま『ジロスラム街の路地裏でのたれ死んでいただろ。ジンさんは死んじやいないよ。お前のおばさんはうそをついてでもお前に親父の跡をついてもらいたくないようだな。

だが、どうみてもお前達は優秀なハンターの器量だよ

（やつたー、このシーンをなまでみれるなんて、転生してよかつた

ー。…ん？お前達？）

「えつ！ちよつとなにお前達って？」

「当然だろ。こんなとじであれだけ気配をけせるなんて普通のやつにはできねーよ

（やつちよつたー）

「よし！アリス！いつしょにハンターにならうぜーーー。」

（はあー、うれしいよ、かなしいよ、かなしいよ……）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6752j/>

P×H

2010年10月8日21時28分発行